横浜市立立野小学校

意欲・熱中・満足

令和３年度第６号

９月１日発行

学校だより

オリンピック・パラリンピック２０２０から学んだこと
～自分の言葉で語る大切さ～

副校長　川田　由紀

この夏、私はオリンピックをどっぷりとステイホームで観戦しました。勝敗の行方に一喜一憂するとともに、選手のインタビューや実況中継の言葉に心を打たれました。試合直後の選手の本音や、その場でしか表現できない実況中継など、今年の夏もたくさんの名言が生まれました。

私はずっと体操の内村選手を応援していました。彼は、「『報われない努力もあるんだ』『努力の仕方が間違っていたんだろうな』でも、『あらためて体操は面白いな』と思った。失敗してなお、『人生においてこういうことも大切なんだろうな』ってすごく思います」とコメントしました。まさかの鉄棒落下で予選敗退となった体操界のレジェンドの言葉に込められている、『報われなくとも投げやりにならずに、努力の仕方を変えてみる』という発想に、これからの仕事への活力をもらった気がしました。

心に残る言葉はまだまだあります。柔道で金メダルを獲得した高藤選手の「豪快に勝つことができなかったが、これが僕の柔道です。」スケートボードで金メダルを獲得した堀米選手の「自分を信じられたのが一番大きかった。」卓球男子団体での丹羽選手の「僕がどんなにミスしても、水谷さんが『強気で攻めていけ』と言ってくれたので、どんどん調子が出ていった。」などのコメントから、自分らしさ、自分を信じること、仲間を信じること、励ましの心強さなど、大切なことをたくさん学びました。

1964年の東京オリンピックで閉会式の名実況を行った土門アナウンサーは、のちに後輩に「心の鼓動、心の言葉で話しなさい」と語ったといいます。その場、その場で感じたことを自分の言葉で伝えることは、普段から意識していないと、思いはあってもなかなか言葉にならないものです。読むのではなく、その時に感じたことを述べる生の言葉には、臨場感があり、その人らしさを感じることができます。だからこそ、学校の日々の学習での発言の場を大切にしていきたいと思います。そのためには、もちろん、どんな内容でも、たとえ自分とは違う考え方でも、温かく聞き合う学級風土づくりが基盤となります。

努力、自信、感謝、チームワーク、多様性と調和、世代交代での大切なものの継承等、このオリンピックで感じたことを、学校現場でも実践していけるようにしていきたいと思います。

さて、感染症の急激な流行により、８月末まで臨時休校措置がとられました。夏休み明けの子ども達との出会いが先に延びてしまいましたが、子ども達はこの夏、何を感じたでしょうか。話を聞くのが楽しみです。ますます厳しい状況で分散登校での学校再開となりますが、引き続き新型コロナウイルス感染予防の対策には最善を尽くしながら、夢を語れる子どもたちに育てていきたいと思います。